る辯言數則を增補し、莊雅なる一册本として新に刊行されたり。今朱氏刊本に據り之に訓點を施こし原本のまゝ縮撮し以て同好に頒たんとす。漆工家は勿論一般の工藝家、美術史家は必ず寓目さるべき稀世の珍籍なり。

此の本の實費刊行の企があつて右の廣告文を受けた編輯子はいろ〳〵相談の結果月報購讀者には月報附錄として差上げる事に致しました。

但し上製（和紙に刷つたもの）を望まれる方は實費金五拾錢也を添えて田邊孝次氏へお申込を願ひます。

（『東京美術学校校友会月報』第二十六巻第五号）

③ 大村西崖の死去

教授大村西崖は晩年に至ってなお一層研究、著述、講演、文人画の制作等に精力を注いでいたが、大正十五年春から体調を崩した。同年五月に第五回目の支那旅行を試みて呉県角直鎮の保聖寺に赴き、楊惠之作と伝えられる塑像羅漢を調査。これを『塑壁残影』として出版し、十二月には自作文人画展を開いて作品集『胷中邱壑』を出版したが、翌昭和二年一月喀血し、三月七日（公式文書には全て八日と記されている。）に肺癌のため急逝した。告別式は十一日に牛込区矢来町三番地の自宅で行われ、十三日に郷里静岡県岩淵で本葬が挙行され、同地光栄寺に埋葬された。

西崖の業績については本書で既に再三触れたが、なお参考のために正木の追悼談話を左に転載する。

大村西崖氏の死を悼む　　正木直彦

大村氏は美術學校第一回の卒業生で明治廿六年に卒業された。その時の卒業生は日本畫に横山大觀彫刻に大村西崖、白井雨山氏が居た。横山、大村の兩君は學校を卒業するとすぐ京都の美術學校に教師となつて行つた。其後東京に歸り永く美術學校の教師となつて居たのである。

大村君はモト〳〵彫刻の出だけど、それでなく美術の歴史を教育した。それに彫刻の出身でありながら、入學前から繪畫の方をやつてゐたし學校の方針もやはりさうであつたので、繪畫の方にも隨分精通してゐられた。美術の歴史の研究を進めて行くと、どうしても支那の事や、佛教を研究せねばならぬ。それで大村君は盛に佛教の一切經を繰り返し〳〵讀んだ。亦漢籍をも片端から讀破したのである。その精力は非常なものであつた。その讀書の方法が非常に早くて要領を得てゐた。それが皆後に役立つて行くのであつた。審美書院から出てゐるたくさんの美術書は大村君の手を經てゐないものはないであらう。「東洋美術大觀」は日本で出來た美術書の中で最も廣汎のもので、其の材料の蒐集から説明はこと〴〵く氏がやつたものである。

氏の著述には「日本繪畫史」「支那繪畫史」「支那〔美術史〕彫塑編」などある　この「支那彫塑編」は氏の著述中でも最も努力を拂つてゐる非常に價値のあるものである。氏は亦佛教を研究し出してから密佛を研究し「密教發達史〔志〕」を漢文で書いてゐる。これは五册のもので、漢文であるから支那の僧侶や西洋の佛教研究者などにも廣く讀まれてゐる　これは遂に日本學界の評判とな

り、帝國學士院から其の功績を認められ學士院賞を贈られた「支那繪畫小史」なども支那に傳はつて支那の學校の教科書などに使用されてゐる。

最近「圖本總覽」などの著述の計畫もあつたが仕事半にして斃れたが、返す〴〵も傷ましくおしき限りである（談）

（昭和二年三月十日『国民新聞』）

『東京美術学校校友会月報』第二十五巻第八号には西崖の写真入り追悼記事（経歴の記述に数ヶ所誤りがある。）が二頁に亙って掲載された。その中に西崖の膨大な著述の抜粋が「大村西崖先生編著年表（仮）」として掲載されているが、編著年表については吉田千鶴子著「大村西崖の美術批評」「大村西崖と中国」（『東京芸術大学美術学部紀要』第二十六号、第二十九号）所載の年表を参照されたい。

④ 石田英一の在外研究

昭和二年二月三日、金工科鍛金部教授石田英一（ひでいち）は文部省より満三年間フランスにおける在外研究を命ぜられた。

石田は明治九年四月十一日佐賀県に生まれ、同三十三年本校鍛金科を卒業し、同三十八年十二月本校雇、同四十年六月助教授、大正十四年教授となった。明治三十三年以降軍籍にあり、度々応召し、大正四年除隊する時点では陸軍歩兵曹長であった。

石田の海外派遣上申案（「大正十五年在外研究員関係書類庶務掛」）には派遣を要する事由として

右石田英一ハ本校鍛金科（現時金工科）出身ニシテ金工科ヲ担当スルコト二十年ニ及ビ優秀ノ技能ヲ有シ金工技術ノ研究ニ熱心ナル者ナルニ付益々其技術ノ蘊奥ヲ究ハムル為ニ歐洲ニ於ケル金工術最新ノ實地的研究ニ従事セシメタク派遣ヲ必要トスルニ由ル

と記されている。彼は昭和二年三月三十一日（実際は四月二十五日）出発、在留期間短縮により同四年六月十六日に帰国し、復職。本校廃止まで在職し、東京芸術大学非常勤講師もつとめた。

⑤ 矢代幸雄の欧米出張

昭和二年三月二日、教授矢代幸雄は文部省より欧米出張を命ぜられた。矢代自筆の出張願（「昭和二年職員関係書類庶務掛」）には次のように記されている。

歐米出張願

小生儀去ル大正十年ヨリ大正十四年ニ亘リテ、西洋美術史ニ関スル文部省在外研究員トシテ歐洲ニ滞留中、主トシテ「イタリヤ」文藝復興期ノ画家「ボティチエリ」ノ研究ニ従事シ、研究ノ結果ハ、之ヲ論文 A Newly Discovered Botticelli（英國 The Burlington Magazine 大正十四年四月号登載）並ビニ著書 Sandro Botticelli 三巻（大正十四年十一月ロンドン市 The Medici Society 出版）トシテ発表致シ置キ候。然ルニ此発表ハ小生ノ企圖シタル研究計画ヲ盡サズ、特ニハ「ボティチエリ」ノ史的考察ニ缺ク可ラザル「ボティチエリ」トソノ周圍トノ関係ニ